
白物語

白龍閣下

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白物語

【Nコード】

N2662L

【作者名】

白龍閣下

【あらすじ】

同作者の『白世界』の外伝的な話を。本編に比べ低速度でお送りいたします。

新聞部騒動、その後（前書き）

晴希「あー、この『白物語』だが……」

嘉光「西尾維新先生の新作だな」

晴希「おい大嘘つくな。確かにそれっぽいタイトルではあるが」

嘉光「嘘だ。こちらでは白世界が大人の領域に入る」

晴希「だから大嘘をつくな。R15のタグすらついてないだろ」

嘉光「作者のお茶目だな」

晴希「いやお前だよ」

新聞部騒動、その後

「そうか、一緒に風呂すら入れないのか！ やっぱりガードが固いな晴希も！」

「同年代の男子と一緒に風呂に入ること拒むのは女子高生としてはかなり普通の粹に達するはずだが！？」

俺の快いスキンシップにもかかわらずそう叫びながら少し中性的な顔に男口調、俺の嫁たる最高の女子である秋津晴希は夕暮れの中自らの家に向かい駆けていった。

ではとりあえず、この日の出来事を簡潔にまとめてみよう。

それはもう、本当に大変な事件だった。

晴希が新聞部に連れてかれて、そこでまあ俺こと内藤嘉光ないとうよしあきは錯乱さくらんして殺してやるだの何だの言って。

それで小枝さんこえに右の関節全部逆に曲げられて。

なんだかんだ言って「召喚獣」とかいってるよく分からない一年生かみじろうおつの神城羅央が新聞部室に乗り込んで。

その後で俺も小枝さんと来たけどその味方のはずの一年がなぜかいきなり壊れて。

晴希が襲われそうになって、いつの間にか同行してた小枝さんがいなくなってる。

それで流れで新聞部の部長と手を組んで、何とか一年を正気に戻して。

で、結局無事に文芸部室に戻ってこれた。

全く、放課後にもものすごい大冒険をしたもんだ。もし電撃とかなら主人公になれる勢いかもしれない。

……いや、それは晴希の方が。コイキングより弱いだとか自重してるけどさ、それでもあんな事態に陥おちいつても晴希は晴希だった。結構順応性が高くて、それでいて本質は変わらなくて。そんなのは一

種の憧れすら持てる。

秋津晴希は、最高の女なんだ。それは俺が保証する。

「……以上、説明終わり。それにしても体力が無いなんて言いながらあんなにダッシュで帰って……意地を張られたか」

可愛いもんだ、そう冗談を**呟**きながら俺、内藤嘉光も帰路に――

「いや、ちよっとくらい尻拭いでもしとくか。晴希も見送ったことだし」

つこうとしたが、そのままビデオの巻き戻しのように後戻りする。家より先に行くべき場所が、他にあった。

目的地到着。ここが董城高校か……いやあ、ついさっきまでいた場所だけどさ。

そして、その校門のところで一人の男子生徒と出会った。

「内藤先輩、忘れ物ですか？」

「いや、そうじゃない。それで菅原、お前の方はどうなんだ？」

菅原ト全。俺が文芸部に連れてきた一年生だ。晴希には「微妙さにおいて他は他の追隨を許さない」奴とまで言われていたような奴だ
が。

とりあえず、ポジションは文芸部のコックだ。こいつの蝉料理は普通に美味い。きつと海原先生も唸る出来だ。なぜか晴希には嫌が
られているようだ。

「食材を調達してきたもので」

武器……新聞部室に突入する際には海苔が無い蒟蒻がないなどと同行を断ったわけだが、果たしてそれらのことだろうか？

「おいおい、新聞部との戦いはもう終わったぞ？」

いや、普通に食材として使うのかもしれないけどさ。そうじゃないとも言いきれない。

「ああ、いえ、これからバイトで使うもので」

「バイト……？」

うちの高校はバイト可能だっただろうか？ それにバイトだとしても、わざわざ学校に来る必要はないと思うんだが……。

「更に詳しく言う…… まあ夜のバイトですね」

菅原は更にそんなことを言ってくる。夜のバイト……？ なんだかいかがわしそうだ。

「……それは高校生のやっていい仕事なのか？」

一応聞いてみる。後輩をいい方向に導くのも先輩としての勤めであり晴希の婿^{むこ}たる条件だ。

「まあ…… あまり一般的に受け入れられる仕事ではありませんね」

「大丈夫なのかそれ？」

「大丈夫です。少し体力が必要ではありますが」

「おおっ」

この後輩はもしかしたら俺たちのずっと先を行っているのかもしれない。そう考えると怖い。

「やめた方がいいぞ。今に痛い目を見る」

「見ません」

自信たっぷりだな。というかこの平然っぷり、もしかしたら俺が想像してるようなバイトではないかもしれない。それなら安心だ。仮にそうじゃなかったとしたら…… その面の厚さが怖い。たちまち先輩としての威厳を手放す勇気が必要だ。

「…… まあ、深くは突っ込まないでおくか」

「それがいいです」

ああ、じゃあこの話は終わ리と言っことで。

「軽く惨劇^{さんげき}を見ますから」

「本当に何のバイトなんだよ！？」

「だから海苔とか使う仕事ですよ。一つしかないじゃないですか」「いやたくさんありそうなんだが……。食べ物…… はありえない。誰に食わせるんだって話だから、そうなる……。」

「…… 掃除？」

適当に閃いたことを言ってみる。もしかしたら消臭剤とかに使うのかもしれない……多分だけど。

「似たようなものです」

「そうなのか」

「そうなんです」

軽い惨劇の起きる掃除って何なんだろう。ウイルスが死滅していくって意味の詩的表現か。うん多分そうだな。後輩よ、お前はきつといい詩人になれる。ハイネみたいな。

「というわけで、俺は新聞部室に行ってくる」

一足早く下駄箱に向かう。残念だが後輩と一緒に文芸部室に行つてはやれない。

「新聞部室ですか。文芸部室ではなく」

「ああ、新聞部室に行くのが子供の頃からの夢だったんだ！」

そんな冗談を言っておき、俺は玄関に入ってしまった。

まああいつのバイトと言うのがどうやら除霊師とかいう仕事だというのが想像だになかったが。

新聞部室が見えた。見事なまでにドアが蹴破られているのには、若干の悲壮さすら覚える。

あの時の神城はまだ壊れていない状態だったのだから、せめて普通に開けるくらいの配慮はして欲しかった……というのはもう過ぎた話だからやめておくか。

それに、もし俺でもあの時の勢いだと蹴破っても全然おかしくなかったしなあ。

「お邪魔しまーす！」

そう声を上げて中に入る。すると、部の規則で定められたという眼鏡をかけた部員達がこちらに振り向き、

『な、内藤嘉光！』

『ど、どうしてここにいるんだ！？』

『奴は……別の世界にいるはずなのに……』

何だろっこの反応は。一体何があった。そう言えば晴希は「お前はパラレルワールドに行ったことになってる」みたいなことを言っていたな。よくわからんが関係あるのかなそれ。

「由宇さん、これはどういったことで？」

困ったので、とりあえず一番奥で窓の向こうを見ている部長、仁科由宇さんに声を掛けてみる。由宇さんなら一体どうして皆がこういう反応をしているのか知っているのかもしれない。

俺のその問いに対し、由宇さんは視線を窓の外から外さずに答えた。

「……そうですね、確かに枯山水は素晴らしいですね」

一体どこをどう聞き間違えたんだろう。

しばらくすると、由宇さんは視線を窓から外し、やっと気付いたといったように口を開いた。

「ああ、内藤さんですね」

「部長、俺は幡野はたのです」

「すみません、間違えました」

いきなり由宇さんに声を掛けられた男子部員が間違いを正す。：

いや、大丈夫なのかこの人？ 晴希もよくこんな人を長い間相手にしていながら体力が持ったな。

「それで内藤さんはどのようなご用件で？ あなた方文芸部との戦いはもう終わったはずですが」

「いえ、ですからこの部室の状況、大変でしょう？」

「まあ、そう……ですね」

晴希とかがもう帰ってしまっているこの時間に大勢の新聞部員たちが残っているのも、どうせ荒れ果てた部室の片付けとかだろう。

「それで、俺も手伝おうと」

「ふっ……」

俺の厚意ある台詞に、なぜだか由宇さんは苦笑した。

「いや、なぜそんな不気味な笑いを……」

「そんなことを容認したら私達はもしかしたらあなたに足元を掬^{すく}われかねない。それなのに許すとても？」

「……」

確かに非常にその理屈はわかる。片付ける不利をして新聞部にとつて重要なもの——例えば書類やパソコンのメモリなど——をくすねる、なんて真似も難しくないからだ。

「まあ許しますけど」

「結局許すんですか」

この人、何かを企んでいるよう見えて実はかなりいい人なんじゃないだろうか。

「しかし内藤さん、ここの部室に入ってくるときはできればノックを心がけてください」

「肝心のドアは蹴破られているんですが」

「……そう言えばそうでしたね」

「由宇さん、疲れてますか？」

「……そうですね、確かにビタミンCの抗酸化作用は大事でしたね……やっぱり駄目だ、この人。会話が成立しているように見えて実質していない。」

そんな由宇さんは面^{おもて}を上げ、全部員に届くようにこう呼びかけた。
「では皆さん、この内藤さんを神と思いつながら協力してもらいなさい！」

「ちよつと待ったあ！」

由宇さんの客人に対する滅茶苦茶ともいえる扱い方に異論を唱える人物、それは一人しかいなかった。

俺だ。

「内藤さん、何か異論でも？」

不意に俺の挟んだ「待った」に逆に疑問を唱える由宇さん。他の新聞部員も同感のようだ。

全く、こいつらは何にも分かつちやいない。

「異論だらけですよ。こんな神は神じゃない。これは神のよさと言うものを全く引き出せていない。俺が本当の神を教えてやろうじゃないか！」

「いや、そんなグルメ漫画のような迫り方で言われましてもね……」

お、元ネタを分かっていたようだ。スルーされなくてよかった。というわけで遠慮なく続き。

「いいか？ 俺らにとつての、我らにとつての神はただ一人——秋津晴希だ！」

「な、なんだつてえー！？」

何を今更驚くことがあるんだ。秋津晴希は文芸部に舞い降りた女神であり、俺はそれに挑みつつけるチャレンジャーだと言うことはもう周知の事実じゃないか。

呆然としている新聞部員の一人が、やっとというように口を開く。

「……それじゃあ、俺たちは神を攫（さら）おうとしてたつてのかよー！」

「当然だ。まあ晴希に免じて許すけどさ」

と、俺は優しく罪を認めさせてやる。

すると、それに続くかのようにあちらこちらから新聞部員たちの嗚咽（おえつ）が漏れる。

「俺は……このまま生きていいのか？」

「この罪……どう報いればいいんだか……」

『どうして！？ どうして神様は私たちの行いにもかかわらず生きているの！？』

「うるせえ！」

再び叫び声。勿論俺の。主人公は時に全力になるんだ。いや、でも主人公は晴希か？

「存在意義なんて些細なもんだ！ 確かにお前らがやったような所業は一族郎党を皆殺ししても足りないくらいだが……それでもお前は！ 今を！ 生きてんだ！ 精一杯生きようぜ！」

『イエス、ボス！』

「そんなわけで改めて、お前らの駆け出しの一步は部室の片付けだ！」

『イエス、ボス！』

さて、これで晴希教洗脳完了。俺が本気を出せば朝飯前だ。ちなみに由宇さんは引いてしまっていた。さすが部長だ。ボスキャラは伊達じゃない。

新聞部員たちが机から落ちて崩れた本を並べなおしたり、パソコンに異常が無いかを確かめたりしている。

「~~~~~む」

暇だ。暇すぎる。「手伝う」とはいつたものの、この部をよく知らない俺が手伝える仕事は少ない。あるにはあったが、手伝おうとするたびに「ああ、だいじょぶだから」などと遠慮されてしまう。こんな俺でもできる仕事といえば……。

「……土気を高めるか」

決断した俺はマイクとスピーカーを繋ぎ椅子に片足を載せ、そして——歌う。

「ポオニヨポオニヨポニヨ魚の子オ！　ヴァウオイ海からあやああるあぬわいかあ！」

俺の歌を、聴けええええ！

『うるせえよ！』

部員全員から怒鳴られた。……ごめんなさい。

「内藤さん……とりあえず水でも飲んでください」

見かねた由宇さんがコップを差し出してくる。遠慮はしたが、その視線に（せ）急かされて中の水を飲んだ。

「……どうしてだ」

これは単なる水道水だ。味にも匂いにも舌触りにも、温度にも何の変哲もない。しかし……何かが違うのだ。何だ？　軟水とか硬水とかそんなレベルじゃない。これは一体？　現象はそれだけじゃない。

『あーほんと、歌なんか歌ってないでこれの片付けに手伝ってくれないかなー』

『内藤、それが終わったらこっちも頼むぜ』

『ほんとほんと、折角ご丁寧にも来てくれたんだからさ』

由宇さんのおかげで、周りの部員たちが俺に頼ってくれるようになった。

「それでは内藤さん、全て終わったら聞きたいことがあるんですよ。そして由宇さんもそんなことを言う。

……なんだ。みんな少し変わっちゃいるけど、本当はすごいいい部じゃないか。晴希を攫ってたことで最初疑ってはいたけど、本当に悪いやつなんて誰一人いない。

この後由宇さんのインタビューで晴希について聞かれ、俺は「あいつの素直じゃないところも好きなんだ」とか「あいつは男とか女とか、そんな差別は絶対にしないやつなんだ」とか答えておいた。そりゃもう晴希の魅力ならごまんと語れる自身があるからな。

そして後日——何を間違えたのか、晴希は「腹黒」とか「レズ」とか曲解されてましたとさ。多分断罪されるな、俺……。

女性のバスト宣言

Aカップ、Bカップ、Cカップ、D、E、F、G……etc.

諸君が好むのはどれだろうか？

例えばこれが「君は何座？」などと言う質問だったら「ピザ」だの「餃子」だのとつまらない妄言で誤魔化ごまかすことが可能だが、「何カップが好き？」などという質問になると、ボキャブラリーの貧相な私では「ティーカップが好き」が限界だ。

……違う。今回私はそんな親父ギャグについて語りに来たのではない。そんな生ぬるい、平和なんぞに侵され脳に異常をきたした世界観で物を言っている訳では決してない。

この平和国日本における墮落した市民どもは、事あるごとに「胸がデカくていい」だの「揉みたい、吸いたい」だのと一々五月蠅いめづかしいそれに「着痩せきやせ」、「脱いだらすごい」、「そんな言葉の釣り針にまんまとくつついてくるわけだ。

一体何なのだお前は！ そんなに無駄乳が好みか！

ああくそ、リア充と乳女と糞ビッチとなんかエロいやつはとりあえず死ね！

貴様らを敷金礼金0円の地獄と言う住居に案内してやろうか！

おい穴を掘れ！ 貴様らの墓穴まで掘ってやる義理はないんだよ！
いっぺんたんす
一遍箆笥の角にすごい勢いで足の小指ぶつける！ そんで爪割れ

て死ね！

……つと、

すまん、どこかしら興奮していたみたいだ。 気を取り直して続けよう。

ここまで言ったが、これらは決して私が貧乳であると言う結論には到達しえない。

そう、私は一般的なのだ。ただ周りの胸が大きすぎるだけであつて。

漫画とかではよくあるだろう？ 読者の目から見れば大きい部類
だけどその物語における他のヒロイン達がアレなせいで相対的に貧
乳キヤラと叫ばれるって展開が。つまりそれがリアルで起こって
るって事。

とりあえず私がいづらに劣っているはずはないから、女の価値
は胸の大きさじゃ決まらないと言う事。

……なんていうと、絶対に「その通り、大事なのはおっぱいの形
だヨ」とか言い出すたわけが出てくる。ゆとり教育の成果ってのは
酷いもんだ。

とりあえずそのゆとりどもは後で殺しておくとしてだ。

……いや間違えた。後で残虐に殺しておくとしてだ。

女性の価値と言うのは胸の憤^つましさに決まるのだ。うん、真に素
晴らしい理論だな。

そうなれば私が人間として中の上にあたるのも納得できるし、あ
いつらが淫売の豚であるというのも証明できる。

この話に心打たれた者は、いざ私について来い。新世界を見せて
やる。

まだ胸の形がどうこうといっているふざけたゆとりも、とりあえ
ずついて来い。地獄を見せてやる。

「……杭瀬^{くせ}、いい加減にしろ」

とりあえず、内容がアレ過ぎた。思わず呆けてしまったじゃない
か。

で、これを書いた張本人といえ（私ではない。決して）――。

「……………」

無言だ。

そりゃまあ私の名前が出てないから気にしすぎだと言う意見も分
かる。というかこいつは絶対それを逃げ道にしている。際どい所で

屁理屈を通して誤魔化すのだ。

ただ、それでもこれは酷いだろうと思う。これ書いてた時に、こいつがちらちらと私のほうを窺^{うかが}っていた時点で確信犯だろう。

「……とりあえず杭瀬、ちゃんと消しとこうな？」

「……………」

……喋^{しゃべ}れよ。

梅雨は嫌いだな（前書き）

本当にちょっとした短編みたいな。時期的には本編より後です。

梅雨は嫌いだな

まず、六月というのは好きではない。いや、だって普通そうだろう？
梅雨時、それはつまり一年のうち雨が最も多く降る時期であり、
つまり一年のうち最も湿度が上がる時期であり、つまりつまり一年
のうち最も不快指数が上がる時期だということだ。そんな時期が楽
しいなんて、どうかしているとしか思えない。そしてそれが終わる
と暑い暑い季節だ。地球は私達の事を洗濯物か何かだと勘違いして
いるのかも知れない。

それだけじゃない。六月は祝日が一つもないってのも問題だ。こ
れは確か**のび太君**も嘆いていたことだったと思う。彼の女々しい言
動には所々殺意を覚えるが、体力とやる気が欠如していて、かつ残
念な人間関係を持つという点においては非常に共感を覚える。奴に
共感するなんて、私もつくづく終わっているかもしれないが。

しかし考えてみる。私は学校のある日は毎日毎日脳内桃色のスィ
ーツ（笑）男やらやたらと私に絡んでくる似非無口キャラやら性格
はかなりいい奴なだけに残念な**レズ**の後輩やらと顔を合わせなきゃ
ならないわけだ。本当に毎日が新鮮だよ。悪い意味で。

……という訳で、是非とも六月に祝日を作るべきだと私こと秋津
^{はるき}晴希は思うのだ。それなのに未だそれは成っていない。日本のお偉
い方は何やってんだか。……はあ、これはおそらく気象庁の陰謀だ
な。

「どうしたよ晴希。まるでこう、六月に祝日がないという事実^{あきつ}に落
胆したような溜息は」

容姿と器用さだけは評価できる男、^{ないとうよしあき}内藤嘉光が恐ろしいくらいピ
ンポイントに今の私の心情を指摘してくる。

正直疑わしいんだが、お前は読心術とか出来ないよな？ 実際出
来たりする人がいるからこの部は困るんだが。

「ああ、まさにその通りだよ。毎日お前に会わなきゃならないとい

うのがどれだけ苦痛か……」

そう言って目も合わせないまま私は再び溜息。溜息を吐くと幸せが逃げていくというが、それ以上に不幸の方が逃げていくくらい自分の運は終わっているんじゃないかと私は常々思う。

窓の外では雨が降り続いている。雨音は余計に私のテンションを下げてくれて、つい殺意を覚えてしまう。

「じゃあさ、どうしてわざわざ部室に顔出すんだよ？ それも毎日」
ま、俺としては嬉しいんだけどな、などと嘉光はのたまう。……これは痛い所を突かれた。

「……果たして自らの習慣つてのをこんなに呪った日があったらろ
うかね」

ちらりと嘉光のほうを見る。まずい事に、嘉光が非常に喜んで
いた。はあ、一旦死ねばいいのに。もう一回川に落としてやりたい。

「来なくてもいいんだぞ？」

「いや、だから………ああん？」

嘉光の言う事が意外だっただけに、私は思わずどこぞのヤンキー
のような反応をしてしまった。いかんいかん、私は華の女子高生な
んだ。

とりあえずは気を取り直して考えてみる。

今、来なくてもいいと嘉光は言った。あの嘉光がだ。

らしくない。らしくなさすぎる。偽者か？ 闇嘉光か？ それと
もきれいな嘉光か？ どっちにしろ嘉光と名の付くものである限り
私は受け入れたくは無いのだが。

改めて嘉光の方を見る。……うん、いつもの気持ち悪い嘉光だ。

その嘉光が、訝っている私から視線を窓の外に移し、そうして二
ヒルに呟いた。

「……ま、尾行くらいはするかもしれないけどな」

「この変態！」

そして気がつくとは私は、そう叫んでいた。

「お？ いい反応だな。流石、切れがいい」

何が流石だよ。

「まあ冗談だ——堂々と俺の方から来るからな」

「……駄目だこいつ」

嘉光の事についてはもう閉口するしかないようだ。……元々分かってはいたけどな。ただ、私は今になっても簡単に諦めてしまう事がならないらしい。まさかこんな奴のおかげで人の心の難しさを知る事になるとは。

「で、どうしてこんな俺のために毎日部室に来てくれるんだ？」

「くっ……」

急な嘉光の話の切り返しにはやられてしまった。まあ絶対嘉光のためなどではないのは確かだが。

「……だから言っただろ。ただの習慣だ習慣」

そうだ、全ては慣性であって、そこに私の本心なんて物はない。決められたレールの上を歩いてるようなものだ。そこから逸脱することは私自身のためにも非常に重要な事だが、如何せん未開の地に踏み出すには私は弱すぎる。

私は立ち上がって、部室のカーテンを閉めた。梅雨のジメジメした空は見るに耐えず、テンションから不快指数への嫌なエネルギー変換はなんとしても食い止めねばならない。湿度が低くてもあいつのせいで不快指数が上がっているのはもう放っておくしかないかもしれないが。

……まあいい、これはちょっとした雨宿りだとも思っておこう。私がこの馬鹿げたレール上から離脱できるまでの雨宿りだ。

内藤嘉光の主張

——どうして晴希が神なんだと思う？

——それはな、

——晴希が神だからだ。
内藤嘉光

「……やっぱり、理不尽だよなあ」

「ここは文芸部室——まあ、色々すごい部。何がすごいって？ まあ……色々だよ。」

放課後のこの部屋では、「文芸部は人がいない」というノンフィクションの固定概念を打破するかのように多くの部員たちがいて、部室の広さもそれに見合ったものとなっている。

そこで椅子に座りその椅子の後ろの二本脚だけで立ちながら、運命と言うものの残酷さに俺、内藤嘉光は嘆息している所だった。

「理不尽だと言いたいのはわたしの方なんだがな。お前と出会ったという運命がまず理不尽な悲劇だ」

横から声が聞こえた。若干ながら堅い台詞回し、そして愚痴を言うようなトーンとは裏腹に女らしい高い声だ。

それが誰なのかはすぐにわかった。まあこいつに関しては、俺はたとえヘリウムガスを吸わせて壁越しに声を聞いても誰だか当てられる自信がある。

俺は二本の脚でバランスをとったまま椅子の向きを変え、声の主のほうに顔を向けた。

「なんだ、晴希か」

「なんだじゃないだろ。お前それ絶対声聞いただけで誰だか分かつ

てた反応だ」

ジト目でツッコまれた。まあ、これがいつもの俺たちのやり取りだったりする。

こいつは秋津晴希^{あきつ}。だらしく跳ねた短髪や吊り上がっている割にやる気のなさそうな目、凹凸^{おうつ}の少ない体つきに前のボタンを開けた学ラン（どうやら兄に買わされたらしい）、下は一応スカートだが実はその制服だけしかスカートだけしか持っていないらしい……
……うんぬんかんぬん。

一般に「中性的な女子高生」と言ったら結構いそうだが、こいつは見た目や名前のみならず内面もまさしく「中性的」という言葉が似合う（本人はあまりよく思っていないようだ）。あとツンデレ。あと俺の嫁。晴希可愛いよ晴希。

あ、ちなみに晴希のことは大好きだが別に「男っぽい女とかまさしく男とかが大好き」ってわけじゃ決してないぞ？ 晴希とそれじゃ大きな隔^{へだ}たりがあるのは言うまでも無いことだからさ。

「相変わらず気持ち悪い顔だな」

また晴希にそんなことを言われた。なんだなんだ、そんなに俺のことが気になるか。うん、そんなこと言いながらきつとモノローグでは俺のことを「嘉光」と下の名前で呼んでいるんだろう。きつとそうで……あつてほしい。

「内藤、そのまま体の重心を後ろに倒してくれ」

あつはつは、何を言っているんだ晴希は。そんなことをしたら俺が後頭部を床に打ち付けてしまうじゃないか。

続けざまに晴希の一言。

「そして脳震盪^{のうしんどう}を起こしてくれ」

あつはつは、なんだ、承知の上だったのか。じゃあしょうがない。「じゃあ晴希、その人差し指で俺の額をつついてくれ」

バランスをとったままそんな注文をつけてみる。丁度いいことに、俺も世界の理不尽さに絶えかねて脳震盪を起こしてしまいたいと考えた所だ。今は自分の絶妙なバランス感覚が恨めしい。

だが、なぜか晴希は悩んでいるようだった。もしかすると、こつちが肯定したことに驚いたのかもしれない。

ま、普通はそうだよな。倒してくれなんて、どこのマゾだと言う話に――

「これでいいか？」

おつと晴希は普通じゃなかったみたいだ世界が傾いてさっきまで俺を後ろに倒す為に近づいてきていた晴希の姿が遠のいて――

「……………あつぶねー」

「……………ちっ」

気付けば俺は、空中で一回転して床に膝をついていた。どこからか――おそらくは真正面から舌打ちが聞こえてきたことは気にしないで。ちなみに周りからはなぜか歓声と共に「10点」とか「9点」とか書かれたカードが出てきていた。

「てか晴希お前……………」

その時の俺の眼差しは、きっと信じられないものを見るような目つきだったことだろう。結局つつくのかよ、と。

「何のことだ？」

「そして開き直ったよ！」

驚嘆驚嘆、ああもう俺の晴希って奴はもう。

「まあ大方予想通りだったがな。仮に頭打ってもお前は脳震盪とかには絶対ならないだろう」

諸星あたるみたいに「いででででっ！」って感じで済むだろ、と晴希。まあそんなことを言う晴希も込みで俺は大好きなだけだよ。でもこれだけは言わせてほしい。

「……………なあ、晴希は俺を何だと思ってんだ？」

「それはこつちが訊きたいことだな」

即答された。俺が晴希をどう思ってるのかと。

「え？ ツンデレ」

「即答かよ……………」

なぜだか晴希は呆れたようだった。あれ？

「お前……ツンデレじゃなかったんだな……」

俺は一世一代のシリアス顔を形成しながら、認めたくなかった言葉^{つむ}を紡ぐ。

「いったい何なんだそのまるで新鮮な反応は」

しかもその顔が無駄^{さま}に様になってるし死ねばいいのに、と晴希。

困ったな、ずっとツンデレだと思ってたのに……いや、違う!？
まさかこれは……。

「……これはあえて『ツンデレじゃない』ということにより表現されるツンデレ……」

「うん、お前がわたしを何だと思っているかはもう確定したと言っても過言ではないな」

「なんとという深さ……さすが俺の晴希は尋常^{じんじょう}じゃない」

「お前の秋津晴希になった思えはないし尋常じゃないのはお前の限りない浅さだ」

呆れた様子ながらもツツコミを入れてくれる晴希。やっぱりツンデレだ。ひゃっほう。

しばらくすると、「それでだ」と晴希が話を切り出した。

「一体何が理不尽なんだ。さあ言ってみろ」

そして成仏しろ、とまで晴希は言ったが、実質俺のことを心配してる辺り晴希は優しい。

「ああ、別にお前のことを思ってたわけじゃないぞ？　ただ訊かないと理不尽理不尽うるさそうだし、さつさと未練なくなつて成仏してほしいし」

「ああ……さいですか」

怒りとかそういった感情を顔に表さずに平然と言つてのける晴希に、俺はツンデレと知りながらも敬語で受けるしかなかった。

「クラス分けについてだ」

それでもなんとか開き直り、俺はこの世の理不尽たるものの一つ

を挙げた。

「ああ、違うクラスだったよな。めでたしめでたし」

また即答か。でも全然めでたくないぜこんちくしょう。

「ま……それでもわたしは杭瀬くせと同じクラスだったんだがな」

そう言っつて晴希は部室の窓際に座る読書娘、杭瀬みはる弥葉琉のほうを怪訝けげんな表情で見やった。

どうしてそんな嫌そうな表情なのか、俺にはよく分からない。ひよっとしたらあいつにもデレてるのか？ いやまさか、俺の晴希がレズなんて……。

「なんだか酷い誤解を受けている気がするな……」

晴希はこちらを見ながらそんな発言。うん、分かってるって。晴希は俺の晴――

「なんだか酷い誤解を受けている気がするな……」

……あれ？ 間違い？

何だかこのままじゃいたたまれなさそうなので、俺は「コホン」と一つ下手な咳払いをしてから話を再開した。あまり演技力がないことぐらいは自分でも分かっている。

「とにかくこれは、陰謀いんぼうとしか考えられないな」

「余裕で考えられるけどな。被害妄想もそこまでくるか」

「俺と晴希という二年を代表するカップルが違うクラスなのは、最早陰謀としか思えない」

「一緒になってなんぼという状況の方がわたしには陰謀を感じるのだが。そしていつ、誰と誰がカップルになった」

「いや……俺らの会話にあんまり他の部員が割り込んで来ないのは、そう言うことだろ？」

「……もう部室内じゃそういう扱いだったのか」

そして晴希は額に手を当て、「危ない、この別クラスになったことを機として対応策を練っておかなければ」などと考え込んだ。何の対応策だ？ ……む、よく分かん。

くそ、文芸部の力でクラス換えとかの操作はできなかったのか……

…。

「クラス分けの操作なら出来た」

俺の心を読んだかのように……というか、俺の心を読んだ人の声が横から聞こえてきた。

「……出来たんですか、一宮さんいちのみや」

一宮敦次あつしさんはこの文芸部を纏め上げている先輩だ。特技は読心術で、ついでに生徒会も真つ青の権力を行使できたりする。いや、読心術の方がついてか。

一宮さんはこちらに視線もくれず、パソコンに何か——文芸部なので小説と思われる——を打ち込んだまま答える。

「ああ、偶然にもそういう権力を得た」

「どこが偶然ですか」

「細かいことを気にするな。それでそういう権力も偶然持つてはいたが……それを行使するのが面倒だった」

「ぶつちやけすぎです」

こつ答えたのは俺ではなく、晴希。だが俺も同意見。ぶつちやけすぎだ。

「ま……過ぎたものは仕方ないか」

「そういうことだ。男なら諦める」

そう言うで一宮さんは会話を終え、再びパソコン作業に専念した……と言っても、キーボードをたたくペースは変化していないように見受けられるが。

「なあ、晴希はどうだったんだ？ 新クラス」

対応策がなんなのかは知らないが、晴希の新しいクラスというのは若干興味を引かれる。晴希に近づく虫がいたら厄介だし。

「知るか。元々話すようなのが邦崎くにさきぐらいしかいなかったからな」

「綾女あやめか」

邦崎綾女は文芸部員ではなかったが、去年は晴希と俺とで話した記憶がある。

でも、俺と会話してる時にすごい緊張しているように見えたのは

なぜなんだろう。もしかしたら、たまたま「女の子の日」でも来てたのかもしれない。一ヶ月に一日と聞いた覚えがあるが、もしかしたら例外があるのかもしれない。

……っと、ちよつとデリカシーに欠けてたな俺。

「ちなみに、晴希がいなのは残念だが、俺のクラスはみんな団結力があつていいぞ」

「所詮リア充か……」

今晴希が何かを言った気がするが、まあそれは気にかけないでおこう。それが俺のデリカシー。ふふん、紳士^{しんし}だろ俺？ ごめんな、残念なことに彼女なら既に目の前にいるんだ。

「みんなみんな、俺と晴希のことを応援してくれてるんだ」

「駄目だろそれ」

「例えばな——」

「無視かよ」

^{あいづち}相槌を打つ晴希。

「『リア充は死ね！ 氏ねじゃなくて死ね！』とか『この妻帯者^{さいたいしや}！新婚旅行にでも消えてこい！』とかな」

「ああ……いや、それはきつと応援じゃないと思うぞ!？」

「いやあ、いいクラスメイトたちだ」

「そうか、わたしはお前と違うクラスでよかったと思うよ。色々な意味で」

うつむ、晴希の反応がお世辞にもいいとは言えない。これはどうしたことが。やきもちか？

「晴希」

「……………」

晴希が今度は無視するようになった。うん、これはいかないな。

「俺は、お前のことをずっと大切な嫁だと思ってるぞ」

「嫌なカミングアウトをありがとう!」

とうとう顔を真っ赤にしてそう叫ぶ晴希。うつむ、やはり反応がよろしくない。

「……そういえば新入部員も入ってくるんだな」

再び話題転換。話題の一新。

「話が一転したな」

と晴希。再び平静を取り戻したようだ。

「別にいいだろ。それとも晴希は、俺と話すのが嫌なのか？」

「ああ」

首を縦に振って否定する晴希。

「そうか、やっぱり嫌じゃないよな」

「内藤、病院に行くぞ」

「必要ないさ。……とりあえず新入生の登場によって、この部の恋愛模様も果たして変わるのだろうか、気になるところだな」

「恋愛関係どこにも構築されてないけどな。完全にお前だけだよ」

「いや、ひょっとしたら晴希に憧れるレズの後輩とかそういうのが出てくるかもしれないだろ！」

「嫌だし多分出てこんぞ！」

晴希がまた顔を真っ赤にして叫んだ。まったく、俺は本当に心配していると言っのに……。

……いや、来るかもしれないじゃん？ レズの後輩。

昔話（上）

とりあえず内藤嘉光がうざったい。いつものように絡んでくるのを無視し、私は警戒しながら部室の扉を開けた。微妙な確率で黒板消しが落ちてくるから油断ならない。

さて、知っての通り私こと秋津晴希は文芸部の一員だ。

学園祭前くらいしか文芸部らしさを見たことが無いのはこの高校でも同じかもしれないが、我が董城高校の文芸部はいたずらに人数が多いもので騒がしさも大きく、余計に何部なんだと言う疑問が浮かび上がってくる。

ちなみに内藤嘉光というのは同じ文芸部員で、顔がいい割に馬鹿で阿呆で変態で二十四時間三百六十日永久に脳内お花畑の男だ。いつも私に絡んできて嫁だーとか何とか言ったりする、私が苦手とする人間の一人。

まあ大まかに言えばそういう感じなんだが、今回は珍しく、若干文学的かもしれない話。……いや、やっぱり違うかも。

「あーくそ、頭が頭痛だー……」

今日は嘉光と共に部室に入るなり、大曾根誠文さんがこんな風に国語的に若干突っ込み所のある台詞を口からぶくぶくと溢しながら机の上に頂垂れていた。飾りっ気のない眼鏡に襟まできつく締めた学ランと、見た目だけ優等生のこの人がこんな風にうなだれている様子は、若干シニールでもある。

「どうしたんですか大曾根さん。馬鹿は……大曾根さんが風邪を引くようにも思えません」

「……晴、おめー何言いかけた」

だって、なあ？ 頭が頭痛とか言ってたし。

「そんな事はどうでもいいです。大曾根さんともあろう方が頭を悩ませているのに理由がないはずが無いでしょう」

後ろから嘉光がフォローを入れてくれた。こういう所は気が利く

のにな。本当に残念な奴だ。馬鹿で変態じゃなければ完璧なのに。

「あー、演劇部に台本の依頼を受けてな」

気だるそうな大曽根さん。それにしても、この文芸部に頼むのは正解だったのだろうか？

「先輩方、これを」

「あ、ああ……」

一年の菅原ト全が私達の机の上にグラスを置いた。今までのスー
すがわらほくぜん
プからクール方面に転換したようだが、どちらにせよ蝉らしきもの……いや、まさしく蝉が浮いているのであれだあれ。味より見た目のほうを重視しろ。

「もちろんただじゃねえぞ」

当然のようにリアル素数ゼミジュースに手をつけないまま大曽根さんが付け加える。

「金でもむせり取ったんですか？」

余計心配になった。金貰って悲惨な出来とかやめてくれよ？ 演

劇部の方々が救われない。

「そんな事あるか。常識を知れ」

「ですよね」

ひとまず安心した。こんな先輩に常識云々の説教を受けるのは不
はなは
本意甚だしかったが。

……いや待て、金じゃなかったら？ もっと酷いものか？ 女か？

「おめーが俺をどう見てつか知らんが」大曽根さんが半眼を作り説明する。「代わりに晴が出来るよう頼んどいた」

「サラリと私が巻き込まれた！？」

まったくもって予想外の交換条件だ。プラスかマイナスかも分からない。ある意味ダークホースだよ私。

「新入生があんまし入らずに人員不足だったらしくてな」

「それ逆に罰ゲームですよね？」

「大曽根さん、俺は？」

内藤が出てきてそんな疑問を唱える。大方私と競演したいのだから

う。単純な奴だ。馬鹿なの？ 死ぬの？

だが、大曽根さんのことだ。返答なんて――

「当然頼んである」

イエスしか言うはずが無いだろうこんちくしょう。

「……ま、頑張ろうや！ 俺達の戦いはこれからだ！」

私の戦いもこれからだ。出来ればラブシーンの少ないものを選ばせたい所。隙を見せたら最後だ。福本漫画のようにざわめいている、腹の探り合い。

「それで、思うように進まなかったと？」

「ああ、『昔話で頼む』なんて言われたが、正直『昔話』『惨劇』『銃撃戦』の三拍子揃えるのは簡単なようですねえ難しい」

「ああ、なるほど」

嘉光が蝉ジューズを口に運びながら相槌あいづちを打つ。よく飲めるなあんなの。

「残りの二つは専ら大曽根さんの趣味じゃないですか」

そして私はそう突っ込まずにはいられなかった。三銃士のことか？ あれ？ そう言えば三銃士って昔話だった？ 三国志なら知ってるが。

「『惨劇』は後でどうにでも付け加えられるから、『昔話』と『銃』の両立で考えようまずは」

「はい！」

嘉光が元気よく挙手した。……お前ノリノリだな。

「ほい嘉光君の答え！」

「陰陽師でどうでしょうか」

……陰陽師？ こいつは何を？

それは大曽根先輩にとっても同じ疑問だったようだ。

「はあ？ 陰陽師？ 式神出したり式神にいやらしいことさせたり式神に手榴弾投げさせたり式神にソーコム構えさせたりすんのか？」
などと言っていた。どうでもいいですが式神好きですね。

「彼らなら拳銃なんていりませんよ。超電磁砲レールガンくらい使えるでしょ

う」

「使えるかよ！　というか演じるのは陰陽師じゃなくて普通の人だからな！」

あくまで演技だと言う事を分かってほしい。ヒーローショーじゃあるまいし。

全く嘉光の馬鹿は。そう思って大曽根さんを見ると――

「なるほど！　すげえよ嘉光！　俺にはこの後輩が輝いて見える！」

「大曽根さん、そこは納得しちゃ駄目でしょう！」

この二人は演劇って事を早々にして忘れていそうな気がする。

「となれば後は『恋愛』っすね」

「うん、予想はしていたがもう一個無駄な要素が加わったな」

私も思ったよ。内藤嘉光と言う男がこの好機を活かそうとしないはずがないって。

「つー事は晴と嘉光をどこに配置するかだ。いずれにせよBLだな」

「BLじゃありません。というか大曽根さんは私に対する扱いが全く変わっていない気がします」

「いや、変わってるぞ」

「どこがですか」

男扱いしかしていない気がする。それとも嘉光の言うところの『ツンデレ』状態なのか？

「昔はクソガキだなんて思ったが、今じゃいつちよ前の男じゃねえか」

「ベクトルが見事に真逆で驚きですね！」

酷い、酷すぎる。でもまあ大曽根さんのこんな扱いには慣れているからまだいいんだ。それよりも――

「やりましょう。BLでもいいんで」

この嘉光をどう説き伏せるかだ。さて、恋愛方面を押さえ込むにはどうしたらいいのやら……。

（晴希先輩、私が出ましょう）

そしてこれは後輩の朱鷺^{とぎわ}羽みのりの声だ。こいつは少し前にレズ

であり私に好意を寄せていると言う事が明らかになった。以降、私が苦手とする人物リストに追加されたものの、まあ基本的にいい子なので関わってはやってる、そんな後輩。

さて、こいつもジョーカーだ。嘉光と朱鷺羽、どちらがましかな…。

（ああ、出てくれ朱鷺羽）

考えた末に回答。百合^{ゆり}なんて上等だ。嘉光のリスクに比べれば。

「大曽根先輩、私も——」

「出していいと許可取ってたぞ」

と、朱鷺羽の言い終わらないうちに当然の如く大曽根さん。これも計算のうちだったんですかあんたは。

「偶然にも、って敦次^{あつし}がな」

そしてそんな疑問に答えるかのような大曽根さんの声。そうか、一宮敦次^{いちのみや}さんの意見なら頷ける。あの人は偶然とか何とか言いながら常に計算ずくなんだ。

「と言うわけで、やっぱりボーイズラブは不健全だと思っんですよ！ そんなものならパンツ一丁の男の人が組み合う映像でも見ておけばいいんです！」

朱鷺羽がガチムチパンツレスリングというものを知っているとは驚きだったが、やはり私としてはボーイズラブの所を訂正してほしかった。

「やっぱり男と女がくつつくのが一番ですよ！」

「と言うわけで内藤と朱鷺羽をくつつければ——」

「そうなたっちや困んだよなあ」

大曽根さんが私の台詞に横槍を入れる。最初から分かっていた事だが、この人はどうあっても私を巻きこみたいのだろう。でなければ私を出すなんて奇妙な交換条件を出すはずがない。

更に大曽根さんは続ける。

「んな事をされちゃあ、『組織』にとって都合が悪い」

「いきなりやけに壮大な話になりましたね。驚きです」

「『組織』はなあ、『新しい人間』を生み出すために24時間365日努力してんだよ」

「本当に壮大ですね。勝手に研究してくれれば」

「んなわけにもいかなえ。どういう事が簡潔に説明すんぜ」

そう言うのと、ズバツと人差し指を私に向け、

「おめえは陰陽師の力を体内に秘めてんだ。超電磁砲レールガンもドンと来いだ」

人差し指をしまい、ガッツポーズを取る大曾根さん。何がドンと来いなのかさっぱり分らない。

「はあ、恐ろしい超展開ですねそれは」と、何だかもう呆れながら答える事しか出来なかった。

「そうか……俺が晴希を見て陰陽師を連想したのはそういう伏線だったのか！」

嘉光は背後に稲妻いなずまが走ったような衝撃を受けている。それ、どういう突飛な連想だよ。背後霊でも見たのか？

「当然よ。そいつはいわゆる運命……だが！」

大曾根さんが固く握った拳を横に振り、その時に机の上に置いてある筆箱が三メートルほど飛んでいった。後でちゃんと回収するんだろうなあれ。

「演劇でラブシーンをしないとその力が消えうせちまうんだよ！」

「いくらなんでもピンポイントすぎるでしょうそれは。というか陰陽師の力なんていりませんから」

「馬鹿野郎！」

「いつ!？」

口から妙な叫びが零れるこぼ。まさかいきなり拳骨げんこつをされるとは思わなかったよ。頭がクレヨンしんちゃんみたいに腫れは上がったそうだ。

「面白くねえだろ！ 平和なんて糞喰らえだ！」

「ものすごい理不尽な理由で体罰受けましたよね今!？」

「さて、んじゃテーマ決めんぞ！」

思いつきりスルーされたよ。拳骨までされたのに。どうせやるなら嘉光にやれ。きつと喜ぶ。いや、野郎にやられたらどうなんだろうな。喜ばなくても私は嘉光でいいけど。

「晴希、痛いかな？」

「ああ」

「俺が撫^なでてやる。こっちに來い」

「スカトロして死ね」

嘉光は泣いていた。隣で朱鷺羽が「スカトロって何ですか？」と訊いてきていたが、沈黙を守ることにしておいた。

「ドラゴンボールとかどうよ？」

「ハリウッドに任せてください。あと昔話って事忘れてますよね」
第一の案が鳥山漫画というのはどうかと思う。

「そうか……んじゃここは無難に電車男で行くか……」

「だから昔話って事忘れてますよね。あとどこに無難さがあるんですか」

「そうだったな。ありや確か主人公がデンライナーで登場する現代異能モノだったわ」

「大曽根さん、それ私の知ってる物と全然内容が違います」

「いいと思うんだがなあ……惨劇とか起こせるし」

「惨劇は後回しです惨劇は」

「じゃあなんだ？ 桃太郎電鉄でもやれと？」

「『電鉄』の二文字はいらなと思います。もうデンライナーはこりこりですから」

「俺桃太郎嫌いなんだよな。だって軍隊とか出てこねえじゃん」

「そもそもそれを昔話と併せる事が無理だと思います」

「そこをどうにかすのが文芸部だろ」

「そんな事言われても……」

と、次々と意見を出していった大曽根さんがはっと気付いたように言った。

「そついや俺達、文芸部っぽくねえよな」

「……今更気付きましたか」

遅い。遅すぎる。スローすぎて思わず欠伸あくびが出た。

まあ普通に考えても文学少女なんて言われる人間がそんなに多いわけではないが。

「いなかったっけな？　いつも本読んでて『ああ、文芸部だ』って感じの奴」

……一人いた。だがあれは駄目だ。あいつは実際無口キャラの皮を被ったただの野次馬なのだから。

「いませんよ。そんなのは私の記憶には全く」

さらりと受け流……

「呼んだ？」

昔話（中）

「呼んだ？」

などという声が横から聞こえてきた。聞こえたとは思いたくないが、仕方ないったら仕方ない。

生憎ながらこれはいつものやり取りとは違い無視すると勝手に話が進んでいくだけなのだ。よってこちらから積極的なブロックをしていかなければならない。それはさながらサッカーにおけるゴールキーパーのようなもので、一対一の状況ではどうしても相手の方に寄ることで狙いを狭める必要が出てくる。あまりにも前に出すぎるとフェイントをかけられる恐れもあるが、かといって何もしないと相手は悠々と広範囲を狙っていけるわけだ。

まあ要するに、私のすべきことなんていうのはだな……。

「呼んでない。君の居場所はあつちだ」

こっちに問い掛けてきた似非無口キャラ、杭瀬弥葉琉がこちらに來ないように手を払いながら即答してやる事だ。周りの奴らはあまりの返事の早さに感心していたが、こんなものは基本的な技能である。言ってしまうえばアナウンサーがべらぼうに早口言葉を言い切るのとなんら変わらないのだ。

だがそれでも少しばかり反応が遅かったのかもしれない。決まっただと思っただ私の抵抗も無駄だったらしく、杭瀬は表舞台に立った。こうなってしまうえはもう遅い。覆水盆に返らずだ。コイキングにも劣る一女子高生は所詮自分の無力さに打ちひしがれているのがお似合いのようで。地球滅びないかな。

「そうか、似非無口がいたじゃねえか」

そしてうれしそうな大曾根さん。似非は所詮似非だろうと思うのは私だけだろうか。肉まんの具にダンボールを入れるようなものだ。「おい、頼まれてくれねえか？」

「シナリオなら書きましょう」

杭瀬の方も即答していた。さてはこいつ、本を読んでいる振りをしてずっとこちらの会話を盗み聞きしてたな？ この野郎、虎視眈々（こしたたん）と……！

「杭瀬、一応言っておくが変な話を書くなよ？」

「大丈夫。私に不可能なんてないから」

頼むから私としては変なシナリオを書く事ぐらいは不可能であつて欲しかった。残酷な話ではあるが、世の中にはいろいろな才能というものが確かに存在するのだ。高いところの上つて後で下りられなくなる猫と似たようなものだ。

そんな私の不安も知らず、「なぜなら」と杭瀬は話を続けた。

「私は作者が一番好きなキャラだから大丈夫なの」

「いきなりメタな話に入つたな。で、それがどうした」

「つまり、私がメインヒロインつて事」

「いやないだろ」

そう言うもあつさりとスルーし、自分の鞆を置いている席を離れ、杭瀬はパソコンデスクの方に行つた。そのまま電源を起動させる。

改造により、電源を入れてから起動にかかるまでの時間をコマシヤル一本分まで縮めた文芸部自慢のパソコンだ。

そんなパソコンが起動しワードを開いていた所で、大曾根さんが杭瀬に話し掛けた。

「テーマは『昔話』『恋愛』『惨劇』『銃撃戦』の四つだ。四題よんだいはなし揃つてえのはハードだが、出来つか？」

「無論。頭の中で全体図が出来上がっていますから」

「やっぱりお前全部聞いてただろ。」

「さて晴希、今日も二人の愛を育むぞ」

暇になつた所で嘉光が話し掛けてきた。まあ想定内の展開ではある。代わりに回避は出来ないという点では所詮しよせんは悲しい読みだが。

「今日『も』ってなんだ、『も』って」

「晴希の愛がこもっているなら晴希の呼気だつて二酸化炭素が何パーセントあるうが吸える」

「変態だな」

「晴希の愛がこもっているなら晴希の唇だって吸える」

「極度の変態であることは確かだがせめてオブラートに包んでくれ」

「晴希の愛がこもっているならアスベストだっていくらでも吸える」

「それは冗談抜きでやめてくれ」

後々の事態が深刻になるのは勘弁だ。文芸部から病人を出してはいけない。怪我人は出してもいいかもしれないが。主に嘉光とか。

すると、嘉光の表情が一変して真剣味を帯びたものになった。ああ分かってている。こういう時の嘉光は――

「正直、俺は陰陽師の力なんてものに興味はない」

シリアスだと思わせてふざけたことしか言わないんだ。それでも本人は真面目なつもりなんだろうがな。

「そりゃ大曽根さんの考えた嘘設定だからな」

「だから逃げよう！ 二人で！」

「断る！」

何が悲しくて出演事態のためにこいつと愛の逃避行せにやらならないんだ。どうせしてもしなくても嘉光と一緒にするのは……いや違ударろ、うん違うな。思えば活路なんてものは、最初から確かにあったんだ。

「そうだ、お前と一緒に逃げるくらいなら、私は朱鷺羽とラブシーンをやってやる！」

「な、なんだってえー！」

周囲の人間ほぼ全員が驚愕きょうがくしていた。ちなみに一宮さんと杭瀬は平然としていて、朱鷺羽は単純に喜び、大曽根さんは別の意味で喜んでいた。くっ……だが背に腹は換えられない……。今は耐える秋津晴希、ここが正念場だ……。

「晴希先輩！」

「言っておくが、これは逃げ道だからな？ 決してお前とやりたいたってわけじゃ――」

「それでもいいです！」

「……………」

何だろう、なぜ私は何も悪いことをしていないはずなのに罪悪感に苛まれるんだ？ いやここで罪悪感を覚えちゃ駄目だろう。朱鷺羽エンドとか勘弁願いたいんだが。

と、気付けばもうとつくの昔にパソコンは起動し、杭瀬は既にワープロソフトに数行の文章を打ち込んでいた。
凄く心配だ。一応目を通しておこう。

こんにちは。私は文芸部の秋津春姫^{はるき}。顔立ちのせいでたまに男の子に間違えられたりするけど、心は恋する乙女のつもりなの。

「貴様アアアアアアアアアアッ！」

思わず激昂^{げっこう}してしまった。なんだこれ。やっぱり作者が病気だと駄目だ。いや、杭瀬の話な？

「大変。晴希が壊れた」

「壊れてんのはお前だこのインチキ星人！」

「てめえら！ 晴^{はる}を抑えろ！」

『ラジャー！』

部員達が流れるように動き出し――。

結局大曾根さんの指示により皆に簡単に押し押され、仕切り直し。

「晴希、少しは自重するべきだと思う」

「お前がな……ちょっと待てなんだその顔は。秋津春姫と内藤義晃^{よしあき}の話はもうやめろといったはずだ」

だからやめてくれ。そんな目で私を見るな。

「面白いのに」

「私は面白くない」

「俺もいいと思うぞ」

「内藤は黙ってるこの精神病患者」

「ぬわ」

嘉光が血を吐いて、床に真っ赤な花模様を残して倒れた。さようなら、嘉光。

嘉光の少々派手なログアウトに対し、横では朱鷺羽が「晴希先輩は一对多だと内藤先輩に容赦の欠片もありませんね」などとよく分からない事を言っていた。あとその後の「内藤先輩はずるいです。私も同姓同名のキャラが欲しいです」と言っただのは空耳だったと信じたい。

そうこうしているうちにプロットの細かい部分まで完成させた杭瀬が説明を始めると言い出し、私と朱鷺羽はそれを聞くことにした。大曽根さんが「こいつは最高のシナリオだぞ」と言っていたのがものすごく心配だ。

「さて、話は『うさぎとかめ』」

「恋愛とかそういう要素が全く内容に思えるんだが」

「話は兎が亀にロシアンルーレットで負けて、罰ゲームで全てを失う所から始まるの」

えらくアダルトそうな童話だった。日本昔話ではまず放送されそうもない。まあ所詮学生のやることだからいいんだろうけど。

「ロシアンルーレットって何ですか？」

朱鷺羽が疑問を唱える。てかほんと、ロシアンルーレットも知らないのにガチムチレスリングを知っていたのが驚きなんだが。一応説明をしてやることに。

「拳銃の弾倉に実弾を一個入れて、自分の頭に銃口を当てて交互に一発ずつ引き金を引くってゲームだ。要するに命が懸かっている博打^{ばくち}」

「はあ……」

「分からないなら晴希でやってみれば——」

「分かります分かります！」

杭瀬がさりと危険な事を言い終わらないうちに朱鷺羽が話を終わらせる。こういう所が優しくて、他の奴らとは大違いなんだよな。

だからこそ辛い面もあるんだけども。

「まあそれで、負けたと」

「けど亀は、その銃弾の重みから場所を把握できる能力があったから」

「亀凄いな。せこいを通り越して」

「この事を後で知った兎は憤慨ふんがいした」

「でしょうね。なんでまだ生きているかは知りませんけど」

同感だ。命を賭けたんじゃないのだろうか。

「兎が頭につけていたうさ耳バンドが銃弾の威力を殺したわけね」

「うさ耳バンド強すぎるな。あとその装備からすると兎ってバニーガールか何かだろ」

私がそう言うのと杭瀬は軽く首を縦に振った。本当かよ。

「と言うわけで兎は亀にリベンジを果たそうと、かけっこ勝負を挑んだ」

「ようやく本筋ですか」

「けどここでも亀が重火器で兎を攻撃して妨害しようとするの」

「亀最低だな。あとその装備からすると緑色の迷彩服着た軍隊か何かだろ」

じゃなかったらミュータントタートルズとか。杭瀬はここでも首を縦に振った。バニーガールと軍隊の戦いになるのかこれ。ご都合主義の展開ならきつと兎の勝ちだろうな。

「兎が攻撃を何とか避けて茂みの中に逃げ込むと」

「どうなるんですか？」

続きを言おうとしない杭瀬に朱鷺羽が質問する。お前実は聞き入ってるだろ。

そんな様子を見て満足したらしく、杭瀬は次の言葉を紡いだ。

「秋津春姫と内藤義晃が裸で交わっている現場に直面してしまうの」

「ストップ！ もうやめるぞこれ！」

超展開につぐ超展開。最後までやっていける気がしない。ほら朱鷺羽を見る。沸騰してるぞ。

「じゃあ、続きは本番で」

「本番やめろ！……まさかロシアンルーレットや重火器本物使った
り、裸云々の所で実際に脱ぐんじゃないかな？」

「……勘が鋭い」

「貴様アツ！ この似非弥葉琉ツ！」

「よし晴を取り押さえろ」

『ラジャー！』

ああ、こうなるのか。なんだか既視感きしかんを覚えるなこれ。

昔話（下）

「と言うかこんなの、演劇部にやらせていいのか？」

縄で後ろ手を縛られたまま素朴な疑問を呟く。正直こんな何かのプレイみたいな体勢は嫌だ。鼻の頭も痒いし。膝で搔くか？ 嫌だよそんな事。

前向きに検討するなら、嘉光よしあきが死んでいるのがせめてもの救いかもしれない。一応起きたときのためにあいつも縄で縛られてはいるが。まあとどのつまり大曽根さんを動かさなければ今この状況において危険は無いというわけだ。

ま、今はな。あとは舞台上がらなければならないという奇天烈きてれつな理論をどうにかしなければならぬ。

「やるのは演劇部だけじゃないから」と杭瀬くせ。

「やめろ！ こんな恥晒し大会に私を参加させようとするな！」

ああ、まさに恥晒し大会だよ！ 演劇部の皆さんにも同情だよ畜生ちくしょう！

「それじゃただ単純に面白くない」

「お前のは最早面白さとかそういうのを凌駕りょうがしてるんだよ！」

「……嬉しい」

「今の台詞に頬ほおを赤らめる要素があつたか！？」

もうこいつわけ分からない。最初から分かっちゃいなかったけどさ。

と……。

「ったく、やめねえか似非無口えせ！」

ここで流れを断ち切ったのがまさかの犬根おのぞねさん。杭瀬の横行が許せなかったのかもしれない。……いやでも、あんたちよつと前まで何言つてたよ？

「もつと晴はるの事考えてやれよ！」

「あなたが一番考えていない気がします」

思わず横からそう突っ込んでしまったが、大曾根さんはそれを無視して話を続けた。

正直言わせてもらうと、無視でよかった。この人とかは口を少し滑らせただけでも大変な事になるからな。前にも天森さんあまもり相手に油断して、何故か嘉光とのデートという意味不明だがとりあえず最悪な結果を導き出した事があるし。あれは屈辱だった。あの時のような事は、もう起こすわけには行かない。

私はそう、心に誓った。

「似非無口、おめえの晴を女装させるって逆転の発想は悪かねえんだ」

「女装じゃないし男役にする方がどちらかと言うと逆転してる気がします」

……ごめん、どうも誓いは果たせなかったみたいだ。また口を挟んでしまったじゃないか。まあこれも大曾根さんがスルーしてくれてるからよしとしよう。いいよな？ 後からやってくるってオチじゃないよな？

「コアなファンを狙えるし、お嫁さんになりたいって晴の夢も叶えられる」

「私にそんな夢はありません」

……ただよ。またやつちまったよ。いやしかし、大丈夫なはずだ。二度ある事は三度ある。三度目の正直なんて私は認めな――

「何だ、晴は横から必要ねえことばっか言うな」

「それはあなただと……いえ、何でもありませんから懷から取り出した手榴弾ていりゅうだんのピンを抜こうとしないで下さい。忘れてるかもしれませんがまだ縛られてるんですよ？」

口は災いの元。不必要な事を言っていたのは紛れも無く私でした。反省しますからどうかこの私めを封じ込めている縄を解いて下さい。どうかこの哀あわれな民をお許し下さい。

「さて――」

そんな私の返事に満足したらしい大曾根さんは、再び話を本筋に

戻した。だから縄解いて。

「んじゃなんか案、あるか？」

「はい！」

ここで蝉野郎、菅原すがわらがようやく話に加わってきたようだ。縄解け。

「蝉——」

「誰か他に案は！」

見事なスルーに、菅原は茫然自失ぼうぜんじしつで椅子いすに座り込んだ。どうせまた蝉についての話でも書くつもりだったんだろうがな。それならスルーするのも仕方ない。寧ろ積極的むじにスルーされるべきだ。杭瀬みに。

「ったく、どこのどいつだよ変な要素を付け加えようとしたのは！」

大曽根さんが憤慨しているが、ここで「あなたが主犯でしょ」なんて言ったら手榴弾を投げ込まれる可能性があるので黙っておく。

恩赦おんしやに恩赦を重ねてもらってもせいぜい縄の縛りがきつくなるくらいだろう。

……しかし本当に、いつまで縛られていればいいんだ私は。

(……晴希はるき)

ふと、誰かの声が入ってくる。

(晴希、俺だ)

ああ、なるほど。誰なのか分かったぞ。お前か。お前なのか。

(……内藤ないとう、いつの間に生き返った)

(ついさっきな)

血まで吐いて倒れたくせになかなかの生命力だ。あと三十分ほど死んでればよかったのに。というか……。

(どうして吐血まで行ったんだ？……まあいい。それよりお前のせいで大変な状況になりつつある。責任を取れ)

(俺何にも喋ってなかったぞ！？)

(馬鹿か。お前だから悪いんだ。キャラ的に)

(キャラ的に！？)

(うるさい黙れ)

大曾根さんたちに気付かれるじゃないか。

困ったことがあつたらとりあえず嘉光のせいにおくつて解決方法がこの世の中には存在する。私はそれで幾多の問題を解決してきた。なんて万能なんだ。伊東家の食卓に投稿してもいいレベルだろう。唯一の問題点は伊東家に嘉光がいない事だが。

（あのなら、そんな事言つてたら縄、解いてやらないぞ）

（……それは困る。さっきの言葉を訂正するからこの縄を解いてくれ）

（分かった。お礼のキスは？）

（断る）

それ以上の条件なら縛られてたままの方がましだ。嘉光に助けられるだけでも屈辱なのに、末代まで恥を引き摺^ずつてたまるもんか。

（冗談だ。ちゃんと解いてやるからさ）

と、嘉光は縄をすぐに解いてくれた。しかし無駄に器用だな。あれだけ固く縛られた縄を十秒で解いたぞ。もしかしてその指使いを常々練習してたのか？……うえ気持ち悪い。吐き気がする。私は少し後悔した。

「大曾根先輩、晴希の縄が」

「しまったな。ま、もういつちよ捕まえるぞ！」

杭瀬の無駄な告げ口のせいでまた囲まれた。

「晴希」

「ああ、分かってる。内藤」

選択肢は一つ。攻撃でも防御でも魔法でもない、撤退だ。迷う間も無く走り出した。まるで風の如く。どうだ、これが自他共に認める超低スペック女子の全力だ。

全力を出せば逃げ切れない事はない。部屋を出ればゲームクリア……のような気がする。保証はない。まあ嘉光の主人公補正があればあるいは。だったらこれで捕まったときは嘉光のせいになるんだろうな。うん、実に合理的だ。

そして朱鷺^{ときわ}羽に視線を送っておく。後で鞆を届けてくれるくらい

の事は喜んでしてくれるだろう。

案の定、廊下に出ると誰も追って来なかった。

「さて、行くか」

「演劇部の所か？」

まさか嘉光もここで愛の逃避行なんて答えは言わないだろう。

「ああ。とりあえず話をやめにしてもらおう」

だろうな。しかし。

「お前もノリノリだったろ。どうしていきなり意見を変えたんだ？」

「倒れた後しばらく考えてただけだな、やっぱり演技って形じゃ駄目なんだ」

「どうせそんな事だろうとは思ったよ」

変に一直線なんだよな。この内藤嘉光って男は。そして同時に凄く気持ち悪くもある。

「陰陽師おんみょうじの力なんて糞喰らえだしな」

「……もうそのネタはいい」

そのまま廊下を歩き出す。嘉光が私の肩に手を回そうとしてきたが、私はそれをすぐさましゃがむ事で回避した。

嘉光は少し残念そうな顔をしてから外を眺め、そして二ヒルにこう呟いた。

「お返しのキス、駄目だろうか」

「冗談言うな阿呆あほう」

そうやって私達は演劇部の方へ歩き出した。

では、簡潔な後日談でもしよう。

結論から言えば、演劇部云々の話は根も葉もない盛大な嘘だったらしい。要するに「頭が頭痛だ」の辺りからもう私達は罠わなに陥おちいっていた。この孔明こうめいめ、私達を弄もてあそびやがって。

常識的にはそんな文芸部に全てを任せるような真似をするはずなどないのだが、それでも真実を知った時には流石さすがに驚いた。知っていたのは大曾根・一宮の両先輩だけだったそうだから、きっと皆も

ふざけんなどいったような気持ちだっただろう。

杭瀬は勢いで執筆を終えてしまったが、出来上がったシナリオは恐ろしいほど混沌こんとんとしていて、ある意味でこの文芸部らしいといつてもいい出来だった。参考として、朱鷺羽などはたった2ページで吐き気を覚えたそうだ。新しい拷問こうもんに利用できそうだな。

「ちなみに内藤、先に私がお前の手を縛っておいたのもよく解けたな」

「あれお前が縛ってたのかよ！」

しまったな、これは伏せておくべきだったか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2662/>

白物語

2010年11月6日01時06分発行